

学校の怪談

絶叫ハイスクール

The Haunted High

第三稿

小中千昭

94 / 2 / 7

あの、教室

あの、教師が窓辺に立っている。完全逆光。

教師「（口調・声、重々しく）1963年2月8日、神奈川県相模原市で一人の中学生が突然行方不明になってしまいました。それから半年以上も経って、その少年が函館で発見されたのです。彼は自分が消えていた半年の記憶を全く覚えていませんでした。不思議な事に、いなくなった時と全く同じ服装を彼は着ていました。これはいったい何を意味するのでしょうか……」

溶暗。

聖ミスカトニツク高校ノグラントノ朝

伝令男子A「（ドドドド）うさうさが来るぞーっ！
ハッと振り向く登校中の生徒たち。

三人の女の子の足が、勢い良く歩いてくる。

ヒソヒソ話をする女生徒たち。

女子A「うさうさ よ！ やっぱ違うよねー」
憧憬の目で見つめる男生徒たち。

三人の女の子、揃ってくしゅくしゅソックス。他生徒よりもTightsは短いスカート。

玄関から廊下へ

入ってくる三人。ユダヤの民を迎える紅海のように、道を空ける生徒達

まるでトイールドルダムとトイールドルディの様に太った
双子の男生徒、並んで

トイールドルダム「おい、あいつら何なんだ？」

トイードルデー「知らないのか？ 去年の学園祭でセーラームーンのコスプレやってよ、一躍学園のアイドルよ」

その脇でキャピキャピと見ている下級生の女の子。

女子B「この学校でくしゅくしゅソックス履けるのは、あの人たちだけなんだから」

女子C「あーん、友達になりたい」

教室に向かって突き進んでいく三人の形の良い足。

2年A組教室

後部の扉をガラツと開けて入ってくる三人。

何故か既に教室は生徒達が着席し、静まっている。

教壇には、神経質そうな女教師・恭子。スクエアなミ

ニ・スーツの色は紫。

三人、最後部の席に並んで座ろうとして――

恭子「(キツと睨み)江戸川亜里子！――

王玲菜！――

加藤樹莉！――

あたくしの朝礼には必ず5分前に着席してる様になって、お

忘れ。今日放課後、音楽室に残ってる様に」

くるつと黒板を向く恭子。

三人揃って F U C K O F F !

音楽室/放課後

西日が差す教室に三人だけがいる。

頬杖つきながら、五線譜に字を埋めている玲菜

『もう二度と遅刻はしませんもう二度と遅刻は……』

玲菜「――幼稚園児がお寝しよした訳じゃないんだから。だ

いたいくイーンのヤリ口、超インケンだと思わない？」

亜里子の机上、懐中時計が置かれ、蓋が開かれている。

裏蓋にはテニエルの描く アリス のカメオ。

亜里子「(ぼんやり外を見て)なーんか、どっか行きたいなー」

と、いきなり耳元に口を寄せる樹莉

樹莉「(甘く囁き)カラオケ、行こ?」

悩ましげに眉を顰め、飛び退く亜里子。

亜里子「やめてよもー。あたし耳とか弱いんだからあ」

樹莉「(クス)それってエッチっばい」

亜里子「やだよ、樹莉ってば8曲メドレーとかすんだもん」

玲菜「ねえ! 何かBGMかけない?」

樹莉、教室前方のステレオに向かう。

亜里子「ワグナーかけながら書取り練習なんてやだかんね!」

棚のCDをチェックしている樹莉。

廊下

職員室から出てきた恭子、無人の廊下を歩く。

音楽室近くに来た時、重低音が響き始める。

恭子「ん」

音楽室内

フル・ヴォリウムで鳴っている、ハウス・サウンド。
机の上に乗ってジュリアナ踊りしている三人。ケラケ
ラ笑っている。

ガラスと扉を開ける恭子。口あんぐり。

恭子「(ハッ)およしなさあああい」

学校前の道ノ夕刻

出てくる三人。はっと亜里子、立ち止まり

亜里子「あーっ!」

玲菜「何?」

亜里子「音楽室に時計忘れてきちゃった」

樹莉「うそー。それヤバイよ」

亜里子「ちよつとあたし、とってくる!」

亜里子、戻っていく。

玲菜「で、あたしたち、待ってるっつーワケ?」

樹 莉「(コックリ)ワケ」

夕暮れの校舎

丘陵地にある校舎。背後には小山。
夕闇が迫っている。

音楽室

廊下から玲菜と樹莉の声。

二人口々に「(オフ)ありすーッ！ ありすッてば？」

暗い教室内に入ってくる玲菜と樹莉。

樹 莉「亜里子ーっ？(見回し)—— やっぱいない」

玲 菜「ったく……。何やってんのよ、あの子」

亜里子が座っていた机前に立ち。

樹 莉「時計も無い……。 (教室を見回し)っかしーな！ もっ30分
くらいになるよね？」

玲 菜「もう先帰っちゃったんだ！ あしたブツ殺す！」

廊下

音楽室からブツブツ言いつつ出て来た二人。

玲 菜「ギャッ！」

ポーッと立っている亜里子とバツタリ。

樹 莉「亜里子！ どこ行ってたのぉ？」

亜里子「(ハッ)え？ (困惑)あたし、今、ここに来たと……」

(自信無い)……。 (ハッとして教室内を見て)時計！」

玲 菜「無かったよ、あそこ」

亜里子「ええ…… そんなあ……」

無人の音楽室内。

校庭/翌朝

男子A「うさうさが来るぞーっ！」

亜里子「（混乱）——これ……」

樹莉「どしたの？」

亜里子「あたし——」

玲菜「あげないよ」

亜里子「欲しい……」

玲菜「あげないってば」

亜里子「（虚ろに）でもこれじゃ駄目……。力が弱い……」

眉をしかめて見合わず樹莉と玲菜。

樹莉「ちょっとお！ 亜里子ってばどうしちゃったの？」

亜里子「（ハッ）えっ……うん。なんかそんな気が急にしちゃって」

玲菜「——」

亜里子「（自嘲）変だよ、あたし……。じゃ、先行くから」

席を立つて去る亜里子。

心配そうに見送る二人。

再び視線を戻すと——

亜里子「（自嘲）変だよ、あたし……。じゃ、先いくから」

さっきと同じところにいた亜里子、再び同じように去っていく。

啞然と見送った玲菜、樹莉を見て『えっ』

バタン！ と閉じられるコインロッカー

夜の街

カジュアルなパーティ・ウエア（ややセクシー）に着替えた三人が行く。沈み気味だった亜里子を守り立てる二人。やがて亜里子にも笑み。

アクセサリ露店

覗いている三人。

クリスタル等のストーン類が多く掛けられている。

亜里子、真剣な顔になって物色し始める。

玲菜、ターコイズの指輪をイスラエル人の売り子と交

涉し始める。

玲菜「(ネイティヴっぽく)ハウマッチ・ディス」

売り子「ソレワ5センエンネ」

玲菜「カマーン、デュード! 5千円^ニドン(ト)・ファック・
ウィズ・ジャパニーズ・レイディ」

『降参』のジェスチャーのイスラエル人。

それに構わず、片っ端からクリスタルばかり触つてい
く亜里子。

亜里子「——これは弱い——これも駄目——これも……」

樹莉「(怪訝そうに)ねー、何が弱いのか?」

それに答えず亜里子、触り続ける。

一際大きく、純白のクリスタルを手にして

亜里子「——これなら——大丈夫かも……」

クラブ ダゴン

狭い地下の穴蔵に鳴り響くハウス・サウンド。

高校生達が立錐の余地無く、談笑し、踊っている。

ボディコンの子たちが、入口の方を見てヒソヒソ。

うさうさのお出まし。注目を浴びている。

女 A「(眉をひそめ)来たよ。ミスカトニック学園 うさうさ
の三人組」

女 B「(蔑み)パーティー・クラッシュャー……」

亜里子の首には、あのクリスタルが下げられている。

黒服の幹事役をしている男子が近づく。

黒服男「これはこれは。うさうさのお三方にお越し戴けるとは
光栄の至りです」

玲菜「パー券、持ってないんだけど」

黒服男「いやあそんな、顔パス・オツケーって奴ですよ」

微笑んで玲菜たち、奥へ。

高校生DJ「(ジョン・ロビンソン風)アーユーレイディ^ニ(レディ
ではない) ヒヤ・カムズ・ウサウサニ」

歓声が上がる場内。

フロア中央で、スポット・ライトをいきなり浴びる三人。「え？」という顔。

一瞬のブレイク。顔を見合わせて三人――

高校生DJ、「(オフ) 1! 2! 3! GO!」

ダンス!

決して振りを揃えている訳では無いし、高度なテクニックでもないが、絶妙のコンビネーション。

盛り上がる場内。

得意満面の三人、激しく体を揺する。

女 A、「(無然) だからあの子たち来んの、ヤなんだよ」

UFOの様に回転し、各原色を明滅するライト。地を這う重低音。

楽しげに踊る三人。

しかし亜里子、ライトとビートに眩惑され始める。

それはまるで、催眠装置。

樹莉「?」

亜里子の踊り、力を失っていく。

亜里子、遠い目――。

フラッシュノ音楽室前の廊下

音楽室から時計を手にした亜里子が出てきて、突き当たりのロッカーを見る。

ロッカーの隙間から、光が洩れている。

脅えた顔で凝視している亜里子。

クラブ・フロア

玲菜「(踊りを止め) 亜里子?」

遠い目をしていた亜里子、急にガックリと倒れそうになる。慌てて抱える樹莉と玲菜。

音が止み、静まり帰った場内。三人を見つめている。

樹莉のマンション／外観／夜

山手に建つ、高級コンドミニアム。

樹莉の部屋

子供部屋にしては贅沢に広い。

制服やハデめの服が壁に何着も掛けられている。

しかし基本的にはあまり物が無いサッパリした部屋。ポツンと一人、フローリングの床でトランプ占いをしている、ロングTシャツ姿の亜里子。

次にめくったのは——ハートのクイーン。

亜里子「（小声で）ゲゲ」

と、盆を持った玲菜と樹莉が入ってくる。樹莉はバジヤマ。玲菜はTシャツにスパッツ。

玲菜、ホットミルクの盆を床に置く。

樹莉「もうへーき？」

亜里子「ごめんね、急に泊まっちゃって」

玲菜「樹莉のママがね、これ飲みなつて」

亜里子「ありがとー（カップをおし抱いて飲む）」

玲菜、鏡に向かって前髪にカーラを巻き始める。

玲菜「——あたし——亜里子の心の問題つて様な気がする」

亜里子「！」

樹莉「どついつ事？」

玲菜「だって——亜里子……」

亜里子「（ニタ）悪いけどあたし、親が離婚したくらいで屈折する

程ヤワじゃないから」

微笑む三人。

玲菜「さっ！寝るぞーっ！」

樹莉「今日はあたしがベッドで寝るーっ！」

亜里子「あたしだってばっっっ！」

樹莉の部屋／数時間後

暗く寝静まっている室内。

ベッドに玲菜と亜里子。床に敷かれた布団に樹莉。亜里子の顔、苦しげ。夢にうなされているのか？

イルージョン／廊下

茫然と見つめる亜里子。

ロッカーの隙間から強烈な光が洩れている。

イルージョン／暗闇のトンネル

鳴り響くキリキリキリという機械音。

脅えて耳を抑える亜里子、悲鳴を上げようと口を開けて――

校庭／翌朝

男子Aの口「うさうさが来るぞーっ！」

廊下

ゆきゆきて、くしゅくしゅソックス軍。

トイドルダム「なあ、あいつらって……」

トイドルデー「だっかつらっ！ 何べん言わせんだよっ！――」

音楽室前

三人、音楽室に入ろうとして――

亜里子、ふとロッカーが気になって足を止めて見る。

何ら異状は無い。

音楽室

ステレオから鳴りひびく『トリスタンとイゾルデ』
『愛の死』を唄い上げるイゾルデの声が、生徒達を睡
魔に誘っている。

亜里子、胸元からクリスタルを出し、掌に載せて見つ
める。不思議な輝き……。

見つめている内に、顔から表情が失われていく。
音も無く席を立ち、後部ドアへ向かう亜里子。

ギョツとなつて見る玲菜と樹莉。

まるで自動ドアの様に亜里子を迎えた扉、再び閉じら
れる。

玲菜と樹莉、顔を見合せ、ソソソと後を追ってドアへ。
キツと唇を噛み、ドアが閉まるのを睨む恭子。

廊下

自力でドアを開けて出てきた二人、異様さに驚く。
まるで亜里子の夢の中の様な世界。

樹莉「亜里子！」

亜里子、隙間から光を洩らすロッカー前に立っている。
と！突如ロッカー、左右にスライドして開いていく。

茫然と見守る玲菜と樹莉。

ロッカーの向こうは、光の空間。

亜里子、その中へと歩みだしていく。

玲菜と樹莉、顔を見合せ

玲菜「どうする!?」

樹莉「——」

ロッカー、再び閉じられ始めた。

樹莉、唇を噛んで、走り出し、中へ。

玲菜「ちょ！樹莉二（諦め）あー！」

玲菜も中へ飛び込んでいく。

閉じられるロッカー。同時に内部の光も消えていく。

完全漆黒の空間

玲菜「(オフ) —— ええっ？ こっ？ どうお？」
樹莉「(オフ) 玲菜、どこいるー？」

玲菜「ちよっとこ。どこ触ってんのよ？」

樹莉「(オフ/クス) 玲菜のって、柔らかー」

玲菜「(オフ) はったおされてーんか？」

樹莉「(オフ) ねえ亜里子は？ 亜里子いる？」

と！ 突如闇の虚空に巨大な女の唇が浮かぶ。美しい形の唇だが、ニタニタと笑っている。

その発する光に照らされる三人の顔。

玲菜「(訝しそうに) 何、あれ」

亜里子もいた。茫然と口を見つめている。

樹莉「(唇に向かって) ねーっ！ こっつてどこなのお？」

チエシヤ猫「(男の声) どこでもないさ。だって君たちは、未だどこにも行っていないんだからね」

玲菜「(ムツ) どーゆー事よそれ？」 じゃあ、どこ行っくの？」

チエシヤ猫「決まってるさ、下だよ」

玲菜+樹莉「したあ？ —— キヤアアアアアア？」

突如、下へと降下していく三人。

トンネル

ばおくん……。じめじめした異様な穴蔵。

そこに落ちてきた三人。尻餅ついている。

玲菜「イッてえー」

亜里子「ここ……夢でみた……」

樹莉「あっ！ 亜里子、復活してる」

三人、立ち上がり、見回す。

トンネルだ。古く朽ちた線路が敷かれている

玲菜「学校の地下に —— こんなトンネルがあったなんて」

樹莉「で、亜里子。どうすんの？」

亜里子「えー？ 判んない……。けど、とにかく行くしかないよね」

歩き始める亜里子。

玲菜「(慄然) で、あたしたちも行くワケ？」

樹莉「(小首傾げ)ワケ……?」

続く二人。

トンネルをテクテクと歩く三人。

樹莉「(いきなり)ワッ!」

ビクツとなる亜里子と玲菜。

玲菜「何よ!」

樹莉「(ニコニコ)天然エコーっヤツ?」

玲菜「(深く嘆息)いーかげんにしろよ、カラオケ女!」

亜里子「ねっ! 何か聞こえない!」

ギョツとして黙る二人。

と! 向こうから微かな音が。

亜里子「!」

ギリギリギリ……。ギリギリギリ……。

あの金属の擦れる嫌な音が!

玲菜「何! あれ……」

樹莉「(眩く)怖い……」

三人、無意識に固まる。

金属音の他に、足音が混じり始める。

玲菜「誰か来る!」

樹莉「誰よ! ねえ亜里子! 誰よ!」

亜里子、無言で首を必死に振るばかり。

音、近づく!

恐怖の顔で、闇を見つめている三人。

やがて姿を現す、音の主!

亜里子「!」

それは——男だ。真つ黒な背広上下。兎耳のついた黒い帽子。能面の様な顔。まるで地球の重力に不慣れな様な、ギクシャクした歩き方。そして歩む度に金属が擦れる音。

MI B「——これはこれは。(プシュー)お初にお目にかかる」
三人「??」

男、まるで時代劇の武士の様な口調。喋る節間に、空気が開く様な音がする。

M I B「暗い道中（プシュー）御苦労でござる」

玲菜「——あなた、誰？」

M I B「みどもは、故あって通りすがった（プシュー）者にござる」

樹莉「（冷徹に見据え）もしかして——バカ？」

M I B「奇異にござるか？ みどもの装束（プシュー）若い娘のウケを狙い申したのでござったが」

神妙に自らウサ耳をヒクヒク動かすM I B。

三人、ゲーツという顔。

M I B、懐から亜里子の懐中時計を出して見入る。

M I B「おっと、先を急がねば（プシュー）」

亜里子「ふ、それってあたしの時計三三」

M I B、時計を見せ

M I B「これでござるか？ そなたの間違いに相違ござらん。これは未だ、みどもの物でござる（プシュー）」

時計を仕舞うM I B。

亜里子「（怒って）嘘よ！ あたしの時計 返してよ！」

クルツと向こうを向くM I B。

M I B「みどもがそなたに願い申した事、成し遂げ下さりし折りに
は、そなたの物となり申す。しからは御免！」

亜里子「ちよっ！」

M I B、猛烈なスピードで向こうへ走っていく。
ギューン……。

樹莉「——今の何？」

玲菜「知らないっの！ ったく……」

と、歩き出した玲菜、眼下へ姿を消す。

玲菜「キャッ！」

亜里子「えっ！」

樹莉「キャアアアアア二」

残る二人も、地面の穴に落ちていく。

三人「（オフ）きゃあああああ二」

赤い荒野

目が慣れると——その異景が見えてくる。

寂寞とした荒野。

三人、呆然と立っている。

玲菜「——どこ、どこ？」

樹莉「あたしは、誰？」

ギョツとなって樹莉を見る二人。

樹莉「あ？ あははは、ジョークだってば」

玲菜「（プリプリ）信じられんこの女だけは！」

玲菜、タツタカ歩き出す。追う二人。

足場が良くない荒野を、歩く三人。（以下テンポよく）

玲菜「何が悲しゅうて、高二の女の子がワケ判ないとこテクテ

ク歩かにならんのかね……」

樹莉「ねえ、亜里子も、上の短大行くの？」

亜里子「え？——うん……。実はさ、受験しようとか思って」

樹莉「えっ？ ホントに？ 何で？」

亜里子「てゆっかさ——学芸員の資格、欲しいんだよね。あたし

絵とか見るの、好きだから……」

樹莉「へー……。実はさ、あたしも受験、しようかなとか思って

たんだ。ま、あたしは、単に上の短大行くの、ヤだな、み

たいなさ……。玲菜は？」

玲菜「あたし？——あたし——留学するかもしんない」

樹莉「うそーっ」

玲菜「でも、ただの語学留学じゃあ、典型ハカ・パターンだから、

ちゃんとTOEFLとか受けて——」

樹莉「トッフルって何？」

亜里子「留学資格の英語試験だよ」

樹莉「ふん……。まあ、玲菜は、英語のセンス、あるもんね」

玲菜「センスじゃないよ……。実はさ——英語だけは、密かに

勉強、マジでやってたんだ」

亜里子「そうなんだ……」

樹莉「——あたしたちって、あんましマジな事って、話さな

かったね……」

と、遠くからカチカチキリキリと機械の音が。

耳を抑える亜里子。

樹莉「亜里子？」

玲菜「どっしたの!？」

二人には聞こえていない。

亜里子、ハッとなって走り出す。

玲菜「亜里子!？」

慌てて追う二人。

荒野の中央。

直径3m程の穴が開いている。明らかに人工物。

やってくる三人。

穴の奥から、ゼンマイ仕掛けの様な音が微かに鳴っているのが聞こえてくる。

亜里子、穴を見つめ呆然。

玲菜「亜里子!？」

やや高まる機械音。

亜里子、おもむろに胸からクリスタルを出す。

亜里子「——これを——入れればいいの?。」

樹莉「誰と話してんの!？」

亜里子、頷き、クリスタルを穴の中に投げ入れる。

漆黒の闇へ消えていく、クリスタル。

唸然と見ている三人。

ゼンマイ仕掛けの様な機械音、徐々にパルスが早くなつていく。音量もどんどんと上がり、ジェット・エンジンの様な高周波になつていく。

耳を抑える三人。

と!? ドドーン! 地響きが始まる。

亜里子「キャアアアアア!」

足元をぐらつかせた三人、共に穴の中へと落ち込んでしまう。

樹莉「(オフノ泣き)また落ちるー!」

玲菜「(オフノムカ)いーかげんにしろっ!」

音楽室

『愛の死』が鳴りひびいている。前と同じ箇所。

と！ 最後部の席に、天井から落ちてくる三人。
ガタン！ バタン！ ドカッ！
キッと三人を睨んだ教壇の恭子、般若の形相から……
ニコッ。

音楽室 / 放課後

夕陽が差す教室にソプラノが鳴り響く。
完全に突っ伏している玲菜、樹莉。
ポーッと外を見ている亜里子。

ふと机の上に目をやると——
時計が置かれている！

笑みを浮かべ、手にとりつて蓋を開く。
テニエルの描くアリスが現れる。

と！ いきなり亜里子の耳元に兎耳MIBが口を寄せ
MIB、「(囁く)かたじけない(言つてすぐアウト)」
ゾゾ！ ハツとなって横を見る亜里子。
しかし、教室には寝ている二人だけ……。

学校前

三人、校門を後に歩いている。「疲れたー」

亜里子、ふと後ろを振り向き声を上げる。

亜里子の視線を辿る二人。

校舎の背後から、ダゴンの回転ライトそっくりな
(そのものと言つてもいい)物体が、原色の光を夕闇
に拡散しながら上昇していく。

口をポカンと開けて見つめる三人。

ハウス・サウンドが鳴り始める。

遙か彼方へ飛んでいく光体。

三人、見上げるの止め、何事も無かったかの如く歩き
始める。が——

段々歩みがステップになっていく。

ビートに乗って踊りながら帰っていく うさつき。

ケラケラ笑いながら、楽しげに。

あの、教室

照明、普通。

教師「今は、1986年に、栃木県宇都宮市で本当にあつた出来事です……」

カメラ、引き始める。

教師「あら？ ちょっと！ 信じてないでしょ？ これ、ホントの話なんですよ！（カメラを追い）ちょっと待ってって！ いや、信じて下さい！ ね！ ちょっとってば！」

終